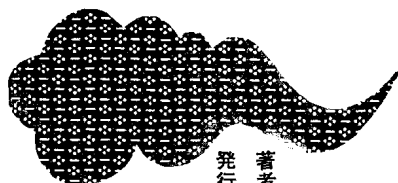


瀬戸内晴美長編選集

9

皮女の夫たち
みじか、旅
瀬戸内晴美長編選集
第九卷

講談社



瀬戸内晴美長編選集 第九卷―彼女の夫たち・みじかい旅

昭和四十九年八月二十日第一刷 昭和五十五年九月十日第六刷発行

著者―瀬戸内晴美 造本―杉浦康平十海保透 発行者―野間省一

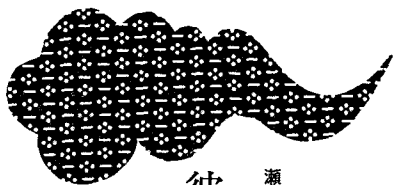
発行所―株式会社講談社 東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二―

電話東京(〇三)九四五―一―一(大代表) 振替東京八―三九三〇

印刷所―豊国印刷株式会社・株式会社興陽社 製本所―黒柳製本株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えます。 定価―一―二〇〇円

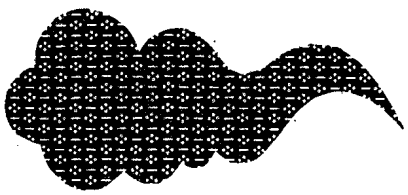
©瀬戸内晴美 昭和四十九年 Printed in Japan



瀬戸内晴美長編選集 第九卷 目次

彼女の夫たち
—
5

みじかい旅
—
371



彼女の夫たち

花と喪服

玄関のドアを内からあけてやるなり鼻先にむせかえるような匂いの束をつきつけられ、

「塩、塩持ってきて」

という挨拶だった。

紹の喪服で、いつもより冴えざえとした顔の和美が立っていた。匂いはくちなしの一束ねだった。いきいきと目に得意さを輝かせ、

「その花屋でこれ一束売残ってたのよ。百円、安いでしょ」

紙にもくるまないむきだしのくちなしはお添え物で、本当の花屋の買ひ物は、漏斗状にセロファンで丁寧にくるまれている黄薔薇の束なのがすぐわかる。

和美の日頃の浪費癖には馴れていても、ふっくらと自分を抱きしめているような蕾の黄薔薇など、一本三十円もするのだろうか、伸子にはやはりもったいなさの方へ心が走る。

くちなしだけは、伸子の手に渡し、和美は薔薇を胸に持ち直して、神妙に塩を待つ表情だった。流行には人一倍敏感だし、生活様式も結構モダンなくせに、古いや磨をむやみに頼りにする癖もある和美は、こんな古風な習慣を妙に固執するところがあった。

伸子がふりかえると、廊下の木玉すだれの向うから夫の

弘太が頭をだし、

「これでもいいだろう」

と、右手をつきだしてみせた。赤いキャップをかむった小さな食卓塩の瓶が握られている。

「味塩じゃないの？ それ、ま、いいや、塩は塩だもの」

和美にうながされ、弘太は自分で赤いキャップをとると、掌に塩をふりだし、ぱっと和美の肩さきに撒いた。花束のセロファンに塩があたり、かすかな音がせまい玄関に散った。

和美は顎をつきだすようにして、軽く目をとじ、塩の祓はらいをつけ終わると、

「はい」

と、黄薔薇を弘太にさしだした。喪服の胸に黄薔薇を抱いた美しさを和美は少くとも異性に見せ、気がすんだのだろうと、伸子は心に苦笑しながら、夫の手から花束を受けとった。

台所で花の始末をし、壺をかかえて居間に帰っていくと、和美は喪服の膝に週刊誌をひろげ、ナフキンがわりにして、西瓜に歯をあてていた。

「よかったわ。西瓜にしようかなって、八百屋の前で迷ったのよ、虫がしらせたのね」

「お客さんにもらったのよ。うちじゃ今年は初物なの」

「弘太にしては気が利きすぎてると思った。ここにあったからなのね」

和美は食卓塩の瓶へ手をのぼしながら、目は伸子にむけて笑った。伸子は姉とはいえ、和美から夫を弘太と呼ばれることは、今でもいい気持ちがない。和美のその呼び方には、いかにも親愛感がこもっていて、和美の年より若い声のせいもあって甘く、愛称じみて聞こえるのだった。

男を替える度、惨めになっていく女と、男が替わる度、いきいきと瑞々しさを加えていく女のタイプがあるものだ。和さんのようなのが、典型的な後のタイプだろうというのが、弘太の目頃の和美観だった。

「あたしは、おそらく前のタイプね。同じ姉妹でも、姉さんと竜子はお父さんの血が濃くて、あたしと節子にはお母さんの血が濃いよ」

伸子は夫の感想に相槌をうちながら、そういう弘太がいつでも和美の結婚や情事の聞き役にされる時、いさめてくれるどころか、賛成する一方というより、むしろ、けしかけるような感じがするのを、内心不満に思っている。かといって、伸子の性格としては、そんなことを夫にいうのはいやだし、まして、もっと心の底にある疑い、（あなたと姉さんは、ほんとは、どの程度までの間だったの）

などとは、口が腐ってもききだせない。

もともと、弘太は和美の男友だちのひとりだったのを、和美が妹の伸子の結婚相手として推薦して来たのだった。

十一年前のことで、伸子は二十四歳だったし、弘太は和美と同じ年の二十九歳だった。

「あたしと同じ星なんだから、二黒土星の丙寅（ひのとら）なのよ。伸ちゃんは大白金星の辛未（さみ）でしょ。相性はまたとない大吉というところよ。女の寅は気が強くてどうかと思うけど、男は勇ましくていいじゃないの、ね、これにときなきさいよ」

まるで靴でも奨めるような調子で、無造作にまくしたて、まだその頃生きていた母の菊乃を、まず煙にまいてしまったのだった。

後妻に入って、和美だけは自分の腹を痛めていないだけに、菊乃は四つの年から育てている和美にまだどこか遠慮があって、母親らしいおさえもきかなくなっていた。

この義理の母親が本当の娘より気の合うところは、ふたりとも揃って占いや迷信が好きだということだった。歳末になると、どっちかが必ず、高島暦を買いこんで来て、ひっぱり風で、時には額をつきあわして、仲よく覗きこんでいた。

今となっては伸子は自分たちの結婚は、姉のお世話とも思っていないし、姉の計算通りに動かされたなどとは思っていない。引きあわせ、一目で、自分も弘太に惹かれ、恋をはぐくんだ上で、弘太にプロポーズさせたのだという自負を持っていた。そのくせ、やっぱり心のどこかで、弘太が結婚前、姉の男友だちではなく、全く見ず知らずの人間として、誰か他人の仲人の世話で見合いさせられたの

だったら、よかったのになど、思わないでもなかった。

和美のような勝手気儘な生き方をして、結構幸福らしくすごしていくのを見ると、自分のように、生真面目一点張りの、小心な馬鹿正直な生き方をする女は、損をしているような気さえしてくる。

「それでね、あたしもお葬式は無宗教でやりたいなあと思っただけ」

西瓜の種をぶつと掌にうけておいて、和美が弘太の方へむいていった。さっきからの話の続きらしい。

「お坊さんなんかなくてさ、ただ本人の写真の花の額ぶちの中へ入れてさ、オルガンだけが鳴ってるの」

「青山斎場だったの」

「そうよ。あたし、あそこは仏教だけしか扱わないのかと思っただけ」

「うん、キリスト教もやるんじゃないのかな、要するに告別式の出来る広さがあるというだけさ」

「オルガンが雨だれみたいに単調なのよ。楽譜見い見い、女の子が頼りない手つきで弾いてるの、それがかえって清潔な物悲しさがあっていいのよ。お焼香のかわりにね、白菊の一枝ずつを参列者が捧げるの。結構、菊の匂いがあつた広い構内いっぱいこもってたわ。すがすがしくっていいなあ、あんなの」

「和さんの時は花は薔薇にするか」

「高いわよ。そりゃ」

「スポンサーつけるさ」

「だって、あたしは死んでるのよ。その時は、つきっこないじゃない」

「どういう関係の仏さま？」

伸子が話に加わった。

「あたしのファンなのよ。書も何かと買ってくれたけれど、何ということなくあたしを可愛がってくれたの、大きな料亭の女将さんよ。昔はずいぶんと鳴らした名妓でしただけ。来ているお花の名札が超一流の名士ばかりだったからそれを見るだけでもちょっとしたものだったわ」

和美の話はいつでも華やかで、デラックスで聞いているだけなら、気分が豪華になってくる。書道家としての和美の腕の程は、伸子にはどの程度なのかわからないけれど、人柄と女としての魅力で、実力以上の地位と人気が得ているのだという仲間うちのそしりも、伸子の耳に入っていないこともなかった。いったい現在の和美がどれほどの収入があるのか伸子には見当もつかなかった。

（交際が派手だし、けちなことの出来ない性質だから、あれで案外きついんじゃないのかい）

弘太のそんな推察にも、そういうものかなと思ってみただけで、びんと来ない。

「あたし、悪いけど、ちょっと仕事片づけて来るわ、ゆっくりでいいでしょう、姉さん」

伸子が、急須の葉をとりかえておいて席を立った。

「あら、日曜も働くの」

「ええ、今夜旅行に着ていくスーツを夕方までに仕立て

ろっていうのよ。昨夜ちょっと予定が狂ったから、時間がないの」

伸子はいうだけいうと、さっさと玄關脇の仕事部屋へ移ってしまった。

「ヒス？」

和美がドアの方を細い顎でしゃくるようにして弘太に低く聞いた。

「ふむ」

弘太はごろっとひっくりかえって、浴衣の裾をうまく脚にまきつけ、膝を組んだ。両手を首にあてがって天井をむいたまま、

「何だか苛々してるんだよ。どっか軀でも悪いのところがうかなあ」

ひとりごとめいていう。

「理由はないの」

和美は白地に銀粉をちらした京扇を帯の間からとり出し、使いだした。扇におこされた風に、和美のフランス香水の匂いがほのかにまざり、弘太の鼻先をかすめていく。目をとじて弘太はその贅沢な匂いを鼻腔いっぱいに吸いこんだ。

昨夜の陰にこもった伸子とのいさかいが、まだみずおちのあたりにどろどろした固りでしこっているような鬱陶しさがあった。

恨みをこめた乾いた妻の目には、もう弘太は女を感じなくなっている。

(十一年か……)

長い歳月だったと思う。二十年も三十年も連れ添って、仲よくやっている世間の夫婦たちの内実を本気でききただしてみたいものだ。三分の馴れあいとごまかしと、五分のあきらめと、二分の情性でみんな結構世間の目も自分の心もつくろって流されているのではないだろうか。

伸子の一本気な生真面目さと誠実さが、そのごまかしを自分にも人にも許そうとしないのだ。伸子のいい分の方が正しく、伸子の主張の方が純粹だと心の底に認めているだけに、弘太には伸子の一本調子に押しまかれると、そういう妻の融通の利かなさがうとましく、まともな返事をかえてやるのも億劫になるのだった。

結婚前は、すべて伸子の長所として、こちらの心まで洗われるような新鮮さと清潔な魅力だったそれらの性質の美点が、結婚十年をこした今となっては、すべてマイナスの方に逆転して、うるさく、重苦しく、氣づまりになってくる。

弘太は男の勝手さ、わがままさを、自分も認めていながら、そう思いはじめた自分の心の蛇(へび)がとれない。

ちょっととしたたわり、ちょっととした愛撫——それを伸子が夫に期待し、勝気なだけに、素直に甘えかれず、じりじり心をくすばらせて、夫から示してくれることを待ち望んでいると、わかつていく。わかりきっているが、いざとなると、乾ききった妻の目に女を感じなく、すっと心も軀も後退していくのをどうしようもない。

「あれで伸ちゃんは理想主義者だからね、現実と理想のアンバランスが神経にこたえるのよ」

和美はいつもの独断で、ぼさっと西瓜でも切りとるような結論をみつけたがる。

「俺がいつこうにうだつも上がらないしね、結婚して以来、苦勞のかけ通しだしね」

「苦勞性なのは伸ちゃんの持つて生まれた性分よ、何も弘太の収入でやっていけないことはないんだもの」

「そうでもないぜ、俺の年にしては少ない方だよ、それに呑むからなあ」

「いやに自己批判がきびしいのね」

「昨夜の今日だからさ」

ほら、というように、弘太は苦笑いしながら高く組んでいた浴衣の裾をめくってみせた。左の脚の膝下、いわゆる弁慶の泣き所の向う脛に紫色の内出血のあざがこびりついている。

「へえ……嚙みつかれたの」

「まさか、投げられちゃったんだよ」

「何を」

「海苔の罐さ」

和美は堰をきったように華やかな高い笑い声をあげた。

「ああ、おかしい、海苔の罐ねえ、なるほど、新しいんだと、あれでわりかし重いし、もろにぶつかるかと相当なものでしょうよ」

「目から火花が出たぜ」

弘太も苦笑いして、毛脛の上のあざを撫でてみせる。伸子が昏い乾いた目付きをして、

「あなたって、一体、あたしを何だと思ってるんですか」

と、上目にじろりと睨みあげた時のいやな表情がまた思いだされる。

「何だって、別にそんなこと今更とりたてて考えてみたこともないさ」

「あたし、もうつくづく厭になっちゃった」

「何が気にいらないんだい」

「あなたはあたしが、ずうっと、不平だということ、ずうっと苛立っているということにさえ、氣付いてくれたことがないんですよ」

「一々、女房の機嫌を伺わなけりゃいけないのかい？ 結婚して十年もすぎた夫婦の仲でさ」

「犬だって猫だって、飼い主の顔をみてもしつ尾をふらなくなったり、すりよって来なくなったり、キャンともニャンとも鳴かなくなれば、どうかしたんじゃないかって、目を覗きこんだり、舌をしらべたり、毛なみをなでてみたりするじゃありませんか」

「そりゃあ、やつらの言葉は俺たちにわからないからな、人間は意思表示することばってものがあるんだから、何も赤ん坊や、犬や猫みたいに、こっちがあれこれ察したり、氣をつかってやる必要はないじゃないか。何だよ、おい、お前、俺の扱いに文句があるって、すねてるつもりなのか

い？」

「すねてなんかいやしませんよ。あたしは、ただ、こういうミシンの一部、でなきゃおさんどんそのままの生活にくづく厭気がさしたのよ」

「だから、何も、内職なんかいいかげんにしとけていつてんじゃないか。それだって、お前は趣味の一つで好きでやっているとあるんじゃないか。それで拒絶本能がなくてつい仕事に追いまくられてしまう。そのとばっちりのヒスをこっちにむけるのは迷惑だよ」

その時、罐が飛んだのだ。

酒の入っていた勢いもあったが、罐を向う脛に受ける一瞬前、弘太は言いすぎたなと後悔はしていた。

伸子の洋裁の内職で、確かに乏しい家計のやりくりは助かっているのだし、弘太が勤め先の出版社から得てくる給料だけでは、弘太の好きな本など二、三冊も買えば家計にひびいてしまうのだった。

大学では仏文学を専攻したといっても、ろくに教室に出たこともない文学青年だった弘太は、親の脛をかじれる間は勤めないつもりでいた。学生時代に書いた戯曲的一幕物が、商業雑誌のコンクールに入ったのに自信を得て、オニールのような劇作家になることを夢みていた。

卒業して二年めに父親が死に、それ以上、かじれる脛ではなかったことが明らかになったので、今の出版社に勤めることになった。

良心的な翻訳物を主に手がけているだけに、あまり売れ

る本はないという出版社は、弘太のような文学青年崩れには、勤めいい方だった。

伸子と結婚当初も、十年経った今も、家計はそう楽ではない。収入が増えただけ物価は上ってくる。十年の歳月には、自分の才能の限界も客観的に見えるようになり、あんまり華やかな未来など、とうてい自分の生涯にはめぐって来そうもないと考えている。かといって、このまま、この程度の状態で、人生の幕が降りてしまうと考えてあきらめきっているわけでもないのだ。

日常性の猥雑な忙しさの中にどっぷりとわが身を浸し、それに溺れて流されているように見えて、ある日、突然、ノアの洪水のような天の審判が下り、どんな形にせよ、このなまぬるい日常の中から、ぬけだせる日の来るのを夢みているところがないでもない。

自分で力を尽して、現状打破をする情熱は薄れているくせに、他力本願の現状脱出は夢みている。

そういう自分の怠惰さを充分知っているだけに、伸子のようなきちようめんな性格の女が、そんな自分に、横でいらいらしているのも、頭ではわかつていっているつもりなのだった。

「第二次倦怠期ってとこなね」

和美がまた、断定するようにいった。

「倦怠期なんて、もう万年倦怠期に入ってるんじゃないかな」

「うちもちょっと倦怠期よ」

「えっ」

弘太が少し愕^{おどろ}いて、上体をおこした。

和美はいっそうあでやかな笑顔に、扇の風を送り、

「ふ、ふ」

と小さく笑った。

「早すぎるよ。おどかしなさんな」

「だって、そういうものは、雨や雪が降ってくるように自然に訪れるんだもの、早すぎるも遅すぎるも、止めようがないわよ」

「だって、まだ、あれから一年とたっていないだろう」

「十一月ぶりよ」

けろりとしている和美の方へ、弘太は起き上って向き直った。

「話、聞こうじゃないか」

「あたし、やっぱり浮気っぽいのかしら」

「また、別口が出来たのかい」

和美は、ちらっと桃色の舌の先を唇の端に出してみせ、首をすくめた。

「そこまではいってないのよ」

義理の弟というより、相変らず和美にとっては、弘太は昔からの一番気の許せる男友だちの一人といった感じがぬけきっていない。二、三度、接吻くらいまでは交わしあった仲だけれど、和美は弘太という時の心のやすらぎに、その頃から、肉親的な親近感を覚えていて、恋人とか、夫とかにして弘太を想い描くと、どうしても軀が高ぶって来な

いのだった。

最初の恋人を、弘太の友人の中から選んで以来、弘太は和美の誰よりも信頼出来る相談相手になってしまった。以来、和美が恋愛事件をおこす度、弘太は逐一、和美の恋の経過を聞かされている。

別れ話の時も、恋のはじまりと同じ熱心さで和美は弘太に一部始終を報告してくる。

「くどかれてるのかい」

「まだそこまでいってないのよ」

「何だ、じゃ、和さんの方が惚れてるのか」

「ううん、こっちもまだそこまでいっていないのよ」

「気をもたせるなよ」

「困ったなあ、ほら、予感ってものがあるじゃないの、男と女の間には、ばつと逢った瞬間、ああ、この男とはどうしても因縁がつくなって、あの感じよ」

「でも、そういう第一印象はえてして当たらないことが多いよ。そういったのは和さんだったじゃないか。あんたのはいつでも始まりは、もうこれは前世からの因縁ごとでただならないと決めてしまふんだ」

「さあ、でも、当たらないこともあるけど、大体、最初の印象でどうかかなりそうだなって、感じたのは当たってたわ」

「大野がそうかい？ 平田がそうかい？ 金谷がそうかい？」

「そりゃあ、今いった三人とも、最初はインスピレーショ

ンがあつたわ」

「そのあと、つづかないってインスピレーションはないんだね」

「それがないのよ」

「不便なインスピレーションだな」

弘太の皮肉は和美に通じないようだった。

「ただね、今までのと、今度はちがうようなの、何だか、決定的なことになりそうな気がするわ」

弘太は思わず吹きだしそうになった。

いつでも、和美は、恋のはじめは、今度は今までとちがうといって来たことを完全に忘れているらしい。

「あら、竜子じゃない？」

和美が耳をすます表情になった。

若々しい澄んだ笑い声が玄関脇の伸子の仕事部屋の方から聞こえてきた。

「珍しいな」

弘太も声の方へ首をのびした。

「あの子、どうして結婚したからないのかしら……ね、もちろん、いるんでしょね、男は」

「さあね。しかしなきや不自然だな」

「男にとっても、ああいう子、魅力あるんでしょ」

「大ありだろうな。ベタベタしなくて。対等に話せて、嬉しいよ竜子は」

「あの、ほら、いつかひとしきりつるんで歩いてたのがいたじゃないの、作曲家の卵だとかっていうの」

「ああ、あれはもうとくに終っちゃったらしいよ。神経質で、嫉きもちやきで女みたいでいやだって、伸子に話したそうだ」

「ふうん……あたしはまたね。あの子もしかしたら同性愛かしらって思ったりしたことがあってよ。でも、そうじゃないんでしょ」

「俺に聞いたって知るもんか。竜子は俺にあんまり、プライベートなことは話したがらないよ。尤もああいう子は、あんまり普通の女の子のように打ちあけ話してはならないんじゃないかね」

「じゃ、あたしは、普通の女だわ。弘太の顔みたら、打ちあけ話ばかりしたくなっちゃう」

「お前さんののは特別だよ」

ふたりが声をあわせて笑った時、

「相変らず、御機嫌ね」

と、ミシンの横の椅子で竜子がいった。

白と黒の長袖のビケのスーツに、黒のチョッキをあわせている竜子は、シングルカットの首筋が瑞々しく、まだ日の経っていない陽焼けのあとが、かえってなまめいてみえた。

「お葬式の帰りなのよ」

「へえ」

伸子はやっと、縫っていた服から、糸をぬきとり、糸切り歯でかちと切りすてると、

「ちょっと、着てみて」

と、その服を目の前に広げた。ローンの花模様の涼しそうな午後の服が形をあらわした。

「いい服ね」

「布地はスイスですって、とてもうるさい人なの、仮縫いの度、いつも気が変わるんで仕立て屋泣かせだわ」

「二倍とってやればいいのよ、仕立て賃」

「あたしんちになんかわざわざ持ってくるんですもの、安いかくるのよ。うるさい人にかぎって、けちなもんよ。もったもお金持って、みんなけちだけどね」

また、居間の方から、火花がうちあがったようにはなやかな笑い声がして、それが近づいてきた。

「竜子、久しぶりね」

入り口から顔をのぞかせた喪服の和美を、竜子は、背中のファスナーに手をのぼしたまま首をねじってみかえった。

辰年生まれの竜子が一番若く、それでももう二十六歳になっている。女ばかり四人の姉妹が揃うことなどめったにないだけに、東京にいる三人が集まっただけでも珍しいことだった。四十になる和美は、三十を少し出たばかりとか見えないため、世帯やつれの見える伸子よりは華やいで若く見えた。

「喪服ってなまめかしいものね」

竜子が、壁にはめこんだ全身用鏡の前で、伸子のためにボーズをとりながら、目は和美にむけている。

「お世辞いってる」

「あら、ほんとよ」

「そお？　じゃ、今日誰かに逢っていいのかな」

「そうなさい、そうなさい」

「何よそれ」

伸子が、裾のヘリにピンをうちながら、いった。

「あたしはいつだって無責任な煽動者よ。和姉さんくらい煽動したくなる対象ってないものね」

「だんだんこの子、悪くなるわね。大人をからかったりしてさ。だからあたし、オールドミスってきらいさ」

「オールドミスなんてことばもうはやらないのよ。そんなこというとお年がしれちゃう」

「へえ？　じゃ、何ていうの」

「ハイミスよ。当節は」

「いやだ、調味料みたいじゃないの。ハイミスなんて、びんと来ないわ。老嬢ってことばは威厳とそこはかこない色気があっていいものよ。あたしは好きだわ」

「とにかく、今はハイミスっていうのよ。あたしなんかもう臺の立ったハイミスだわ」

「あら、あんたまだ二十六でしょ？　オールドミスって感じじゃないわ。昔は二十七、八からいったものよ」

「今は、年々結婚年齢が下がってるのよ。十九や十八がとでも多いんですって」

「ふうん……やっぱり、食物のせいよそれ」

「どういう意味？」

「バターやチーズをうんととるでしょ、今の子たち。軀